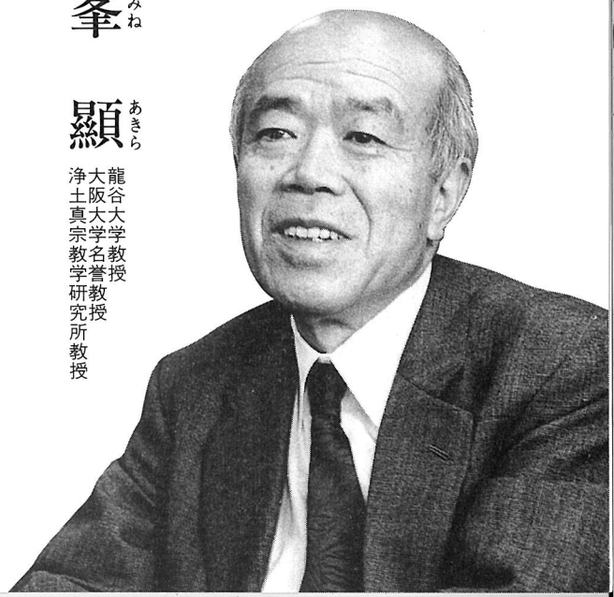
宗教への招待

第六回 生命の自己超越

大峯（おおみね） 顯（あきら）
龍谷大学教授
大阪大学名誉教授
浄土真宗教学研究所教授



生命はなぜ尊いのか

第一回目に、宗教は個人的要求ではなく、個人の内にある生命そのものの根本要求であるということを申しました。宗教というものは結局、私たちが生きているこの命というものの正体を知り、それを本当に生きる、ということに尽きると思います。それで最後に、生命とは何かという問題をもう一度とりあげたいと思います。

今日の日本社会で、いちばん力を持っている言葉は、「生命の尊厳」という言葉だと思います。その他の問題についてはどんなに意見が分れていても、生命は尊いという話になると、人びとの意見は一致するようです。生命の尊厳は、現代では神聖にして侵（おか）すべからざる権威をもった言葉であり、これに異を唱える人はほとんどいないでしょう。

しかし、生命はなぜ尊厳なのでしょうか。そもそも「尊厳」とは何を意味するのでしょうか。現代日本の生命論は、この大切な問いを問うことを忘れているように思われます。今日のわが国においては、宗教家もふくめて、生命は尊厳であるということを自明の前提にして出発しているように見えるのです。しかし生命は、それだけですぐ、意味があるとか尊重さるべきものとか必ずしもいえないと思います。生命をして尊厳たらしめるゆえんのものを見つけないかぎり、いくら生命の尊厳といっても、実は「おたがい死にたくはありませんよね」という心情を言い換（か）えただけのことです。死にたくないという消極的な心情と、生命は尊いという積極的ないのちの自覚とは、決して同じとはいえないと思います。しかし、残念ながら現代の日本人の多くは、命は一つきりですよ、おたがい死にたくないですね、だから命は大事にしましょう、といっているだけではないでしょうか。それだけでは、生命の尊厳はたんなるスローガンであって、生命の問題に対して、実質的には何ひとつ寄与しないと思います。なぜ生命は尊厳かという問いを真剣に問い、これに答えることができたときはじめて真の宗教といえます。そういう意味で、今日のいろいろな既成宗教は、生命とは何かという根本問題に改めて答えるべき課題を背負っているわけです。

生命の動性

「生命」という漢字を辞書で引くと、「生」にも「命」にも、共通して「いのち」という意味がふくまれています。さらに「生」の語には「生れる」「いのちを保つ」という意味と同時に、「産出する」「成長する」という意味があります。「生」が成長という意味をふくんでいることは限りなく重要であります。一方、「命」には「い

のち」の他に、「使命」とか「招喚」とかいう意味がふくまれています。そうしますと、生命（いのち）というものの核心を明らかにするためには、生命という言葉の中にふくまれている「成長」と「招喚」という二つの意味を見失わないようにしなくてはなりません。

「成長」と「招喚」とは共に、生命がたんなる静止した状態ではなく、それ自身の現状をたえず超えてゆくところのダイナミックな動性であるということを告げています。生命は物質や物体のように、固定的に自己を保存するのではなく、つねに自己自身を超えてゆく運動としてあるわけです。より大きく深い生命の次元が、生命の現段階に対して成長を命じ、うながし、招喚するところに生命というものの本質があります。フランスの哲学者ベルクソン（一八五九―一九四一）が「生命の飛躍(élan vital)」と呼んだのも、まさしく生命のこの自己超越のことです。物質の現象はどこまでも分量間の連続の法則、つまり因果律に従って起りますが、生命の現象はそうではありません。生命現象の本質は、量から合成されたり、量へ還元されたりできないところの「質」にあります。つまり、生命はいつでも、量と量とのあいだの裂目を飛躍するという仕方において、自己自身を保持しているわけです。生命は、いわば非連続の連続という法則に従っているのです。

もちろん、そのことは生命現象が物質現象といかなる関係も持たないという意味ではありません。生命は、いわば自分自身がつくる影のように一定の物質的条件というものをともないます。最近の生物学、生化学、

分子生物学などの諸科学は、生命のこの物質的条件についての新しい情報を増加させることに成功しつつあります。しかし、そういう研究はどれだけ進歩しても、生命そのものはすべての量的な条件を超えた一つの質であるという事実を変更することはできないでしょう。要するにライフ・サイエンスやバイオテクノロジーは、飛躍し自己自身を超えてゆく生命の超越運動の跡を追いかけるところにその存在理由を持つものと思われます。

個体化と普遍化

ところで、生命の自己超越の運動には二つの方向があります。その第一は個体化ということです。生命は抽象的な生命一般というようなものとしてあるのではなく、特定の個体としてあるわけです。生きているのは個体ばかりです。一本の草木でも他の草木ととりかえることのできない個体性をもっています。動物になると、個体化はさらにはっきりしてきますが、人間存在において個体化の度は、その極限に達するといえます。ドストエフスキーの小説の中で、ソーニアという子を亡くした母親は、まだこれからも子供が生れることだから、そんなに悲しむなと慰められたとき、あの死んだソーニアでなければ、私のこの悲しみは癒えないと言っています。一人の人間の死によって世界の中に生じた空白は、その死者以外の何人によっても埋めることはできません。かけがえのないものを喪ったという悲しみの中で、私たちは生命がいかなる物質でもないということを思い知るわけです。このように、個体性というものが生命を物質から区別する重要な第一の条件であるということがいえます。生命が個体の形をとるというところに生命の自己超越というものが起っているわけです。

しかしながら、生命はこの個体化だけではまだ本当の生命とはいえないと思います。生命が生命であるためには、このような個体化の次元で停止してしまうのではなく、さらにこの個体性の枠を破って（否定して）、個体以上の普遍的生命の次元へ超越してゆくことがなければならない筈です。生命はさきに申しましたように飛躍と動性を本質とする以上、個体化をもって停止することはできません。もし、そこで停止するならば、それは一種の物質にすぎないでありましょう。個体化しながら、しかも個体の中だけにおさまらず、個体の外にあふれ出る普遍化に、生命の生命たるゆえ

んがあるわけです。個体化と普遍化とは生命の自己超越の運動に不可決な二つの方向に他なりません。そうして普遍的生命へ向う個体の運動が最も純粋にあらわれてくるのが、言うまでもなく宗教の次元であります。

しかし生命のこの普遍化への運動は、すでに生物的生命の次元においてさえ見ることができます。たとえば、親が子を産むという生殖活動がそれです。個体が独立したもう一つの個体を生むという不思議な出来事は、原子の分裂や機械で製品が生産される現象とはまったく異なっています。それは個体の中におさまり切れない大きな普遍的生命が、親と子という個体の中を通過するという出来事を意味するのです。どんなに親の意志や計画があったとしても、親という個体は結局、生殖活動の縁であって、決して原因ではないわけです。親と子とは共に、自分たちを越えた大きな生命そのものの自己超越という運動に参加するのであって、これを主宰するのではありません。生殖活動とは、生命が個体を超えようとする運動が目に見える形をとった場合だといえるのです。ギリシアの哲学者プラトンも、すべての生き物は子孫を生んでゆくことによって、無常の世界のうちで永遠であることを求める、と言っています。たんに生物的生命だけでなく、一般に文化と呼ばれる人間の精神生活、芸術や道徳の次元もやはり、普遍的生命を目ざす自己超越のいとなみであり、それが宗教の次元にいたって最も顕著な形をとると考えることが出来ます。

しかし、現代人の一般的感受性からいちばん遠ざかってしまったのが、まさしく生命のこの普遍化の方向だと思います。現代の私たちには、生命の個体化の方向だけが強く意識され、普遍化の方向はほとんど見えなくなってしまっているようです。生命とは個人の中にしばらく機能しているプロセスにすぎないのであって、個体が死ねば生命も終ってしまうのだ、という生命観が自明のものとなっています。しかし、これは質である筈の生命をいつのまにか量として考えていることを意味します。生命の普遍化の方向を忘れて、たんなる個体の枠の中だけに生命を閉じこめようとする現代人の生命観は硬直しているといわざるをえません。そこからは真の意味での生命の尊厳の自覚は生れてこないでしょう。

世界宗教の偉大な開祖たちはいずれも、それぞれの言葉によって、生命を自分の枠の中だけに保持しようとする個体の自己中心的な生き方を否定して、自分を生かしている大きな普遍的生命に覚醒することを教えているとと思います。世界宗教において「仏」とか「神」とかの名で呼ばれているところのものは、要するにそういう大いなる生命のことに他なりません。とりわけゴータマ・シッダールタにおいて人類史上はじめて、

この普遍的生命へ向かう個体の自己超越が最も純粋な形で遂行されたと思います。釈尊における「正覚」（解脱）とは、個体を中心にしていた生き方、つまり我執の立場が突破されて、生命それ自身、つまり「無我」を原理とするような新しい個体の立場へ転回したことだといえるでしょう。そして「涅槃」とは、生命のこの自己超越の究極において、生命が生命それ自身に完全に還り切った姿を意味しているわけです。

釈尊の場合において最も完全な仕方で現れている、生命のこのような自己超越は、たとえばイエスやソクラテスなどの宗教家や哲学者たちの経験の中にも、それぞれの程度において見出すことができると思います。宗教の本質は、個体の次元での生命が自己を拡大することではなく、個体が自己自身を否定して、個体以上の根源的生命と合体しようとするところにあります。それは個人的要求ではなくて、すべての個体の内にはたらいている生命それ自身の要求です。どんな社会や政治の体制をもってしても、この生命そのものの要求を人間からとりのぞくことはできないでしょう。宗教が政治・経済・科学・道徳・芸術などの、いわゆる文化的ないとなみから根本的に異なるゆえんは、実にここにあるわけです。

大生命環流

それでは、生命の自己超越は、このような個体から普遍へという方向をもって休止するのでしょうか。そうではありません。生命の自己超越は個体化と普遍化という二つの方向をもつということを申しましたが、この個体化という方向が、宗教的生そのものの次元においてもやはり出現するのです。それはとくに、自利・利他を説く大乗仏教の思想と共に明らかになり、何よりも親鸞聖人の「還相回向」の思想にいたって独自な仕方で具体化されたように思われます。還相回向とはまさしく生命の高次の個体化の運動のことを意味しているわけです。

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり

（一二三五頁）

『教行証文類』の本文の冒頭に出てくるこの有名な言葉は、宗教的生命の自己超越が、個体から普遍へ往き、普遍から個体へ還ってくるという一つの円環運動に他ならないことを示しています。生命世界はたんなる無秩序や混沌や偶然の出来事の集合ではなく、普遍化と個体化というダイナミックな根本法則に従っているわけです。

往相回向とは、すべての個体の命が普遍的生命であるところの如来の本願によって招喚され、普遍的生命そのものへと成長してゆく生命そのものの運動のことです。それは現世から浄土へと流れる阿弥陀如来の本願海の大生命海流に他なりません。個体の命に執着するエゴイズムを捨てて、如来の本願力にまかせた生き

とし生けるものは、ことごとく浄土に運ばれ仏に成るのです。しかしながら、この往相回向の海流は浄土で停止するのではありません。浄土にあふれる生命海流は、力強く自己自身を転回して、現世へ流れ還ってくる還相回向の海流となります。生命が生命であるかぎり、その運動は普遍化そのものをさらに否定して個体化の方向をとらざるをえないからです。生命のこの個体化は高次の個体化でありますから、他の個体を普遍的生命の中へ入れるための衆生済度のはたらきです。衆生に対しては、往相と還相という二つの方向をもつ、ただ一つの如来の生命の環流があるだけであります。

生命の運動を一つの円環として捉えたところに、浄土教史、仏教史、いな人類の全宗教思想史の中で親鸞聖人が果した最も大きな功績があると思います。長い間、生者と死者とを隔てていた壁が、この往還の回向の思想によって透明化されたわけです。現世から浄土へ去る道だけを見ていた従来の浄土教においては、この現世の命を本当に肯定することはできませんでした。しかし、還相回向の思想は、この現世にすでに到来している浄土からの道を教えているのです。私たちが一度きりの人生とか、死ねばそれきりの命とかいっているところの個体の生存は、本当は如来の無限な大生命環流の一部分に過ぎないと思われます。人生が直線的な断片に見えるのは、この生命環流の半径が無限大だからです。生れる前から、たのもしい如来の生命の海に浮かんでいる私たちの命であったことを知らされるのであります。